



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	拠点的な場所と＜あるじ＞の役割に関する研究：国内のゲストハウスを事例として [全文の要約]
Author(s)	石川, 美澄
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(観光学)
Dissertation Number	甲第13981号
Issue Date	2020-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/78337
Type	doctoral thesis
File Information	Misumi_Ishikawa_summary.pdf



北海道大学大学院 国際広報メディア・観光学院
観光創造専攻 博士学位論文
【学位論文の要約】

拠点的な場所と〈あるじ〉の役割に関する研究
——国内のゲストハウスを事例として——

石川 美澄

1. 章立て

第1章 序論

- 1-1. 研究の目的
- 1-2. 研究の背景
- 1-3. 本研究の方法と事例のサンプリング
- 1-4. 用語の定義
- 1-5. 本論文の構成

第2章 先行研究の整理と本研究の位置づけ

- 2-1. 先行研究を整理する上での視点
- 2-2. 場所に関する主な指摘と本研究における場所の捉え方
- 2-3. 都市やまちづくり、ケア等の研究領域における拠点的な場所に関する指摘
- 2-4. 拠点的な場所の〈あるじ〉に関する先行研究
- 2-5. 拠点的な場所としての宿の役割に関する先行研究
- 2-6. 観光研究におけるホストとゲストの関係に関する論点
- 2-7. 国内のゲストハウスを事例とした先行研究の視点
- 2-8. 先行研究のまとめと本研究の独自性

第3章 ゲストハウスの運営・利用の特徴と変容

- 3-1. 本章の目的
- 3-2. 調査の概要と手順
- 3-3. 質問紙調査で採用したゲストハウスの定義と対象選定の手順
- 3-4. 調査結果に対する3つの視点
- 3-5. 調査結果1：調査票配布対象施設にみられた変化
- 3-6. 調査結果2：5年間で変化がみられた点
- 3-7. 調査結果3：5年間でほとんど変化がみられなかった点
- 3-8. 2017QS で新たに追加した項目
- 3-9. 回答者属性
- 3-10. 考察と課題

第4章 ゲストハウス開業の動機からみる宿の役割・機能——2012QS と 2017QS の質問紙調査における自由記述分析を対象に

- 4-1. 本章の目的
- 4-2. 調査概要
- 4-3. 分析手法
- 4-4. 2012QS の結果：ゲストハウス新規開業者の背景・動機
- 4-5. 2017QS の結果：ゲストハウス新規開業者の背景・動機
- 4-6. 小括

第5章 ゲストハウスの展開とゲストハウス・〈あるじ〉の役割——〈あるじ〉に対するヒアリング調査を基に

- 5-1. 本章の目的
- 5-2. 調査の概要
- 5-3. 開業年別にみるゲストハウスの展開と役割
- 5-4. ゲストハウスを拠点的な場所として成立させるための〈あるじ〉の役割
- 5-5. 考察
- 5-6. 小括

第6章 宿泊者と近隣住民が見出すゲストハウス・〈あるじ〉の役割——ヒアリング調査ならびに共有スペースでの参与観察を基に

- 6-1. 本章の目的
- 6-2. 調査の概要
- 6-3. 結果
- 6-4. 考察
- 6-5. 小括

第7章 結論

- 7-1. はじめに
- 7-2. 総合考察
- 7-3. 本研究のまとめと成果
- 7-4. おわりに：本研究の限界と今後の課題

謝辞

参考文献一覧

2. 論文の目的

本研究の目的は、近年国内で増加傾向にあるゲストハウスを事例に、人と人、人と社会の接点が生まれるような拠点となる場所（以下、拠点的な場所とする）の意義と、その場所を代表し、日々その場所の適切な運営を行う者（以下、〈あるじ〉とする）の役割を明らかにすることである。本研究では、ゲストハウスという宿を立ち上げ、または前任者からそれを引き継ぎ、日々その場所を運営する個人を〈あるじ〉とし、彼・彼女らの開業動機やゲストハウス運営に対する姿勢、ならびにゲストハウスを利用する宿泊者と近隣住民の意見等の分析を通して、上記に掲げた目的を実証的に明らかにしていく。

3. 各章の要約

第1章

ここでは、本研究の目的や社会的・学術的背景、研究方法、用語の定義等について述べた。まず、本研究ではゲストハウスを事例に、拠点的な場所の意義と、その場所の〈あるじ〉の役割を明らかにすることを目的として、4つのリサーチクエスチョンを設定した。

1つ目は、先行研究における拠点的な場所に関する論点を整理し、拠点的な場所が成立するための要件は何かを明らかにするという点である。2つ目は、国内のゲストハウスを事例とした先行研究の論点を整理するとともに、ゲストハウスの特徴と開業理由、そして経年変化を明らかにするという点である。3つ目は、ゲストハウスの〈あるじ〉の役割を明らかにするという点である。4つ目は、ゲストハウスの宿泊者やゲストハウスにしばしば顔を出す近隣住民は、ゲストハウスという場所やその〈あるじ〉をどのように捉えているのかを明らかにするという点である。以上の4点について明らかにするために、第3章以降では、2012年と2017年に実施した質問紙調査、ゲストハウスの〈あるじ〉・宿泊者・近隣住民に対するヒアリング調査、そしてゲストハウス内の共有スペースにおける参与観察の結果について分析し、考察を行った。

第2章

第2章では、まず場所に関する議論を概観した上で、次の5つの視点から先行研究のレビューを行った。すなわち、第1に拠点的な場所とその重要性に関する論点、第2にある場所を代表し、日々適切な管理運営を行う〈あるじ〉の役割に関する先行研究の論点、第3に宿が拠点的な場所になりうると指摘する先行研究を整理し、宿の役割について整理すること、第4に観光研究におけるホストとゲストの関係に関する論点の整理を行うこと、第5に国内のゲストハウスを事例とした先行研究の視点について整理することである。

その上で、次の5点について十分に検討されていないことを述べた。第1に、拠点的な場所に関する議論の主役は、基本的には住民であり、一時的な滞在者（たとえば旅行者）が議論の中で取り上げられることは少ないという点である。第2に、拠点的な場所を成立させる

ためには4つの要件（「不動（immobile）性」、「小規模性」、「個人による場所の立ち上げと〈あるじ〉の存在」、「旅行者を含む多様な人びとがアクセスできる環境」）が必要であることを確認したが、ゲストハウスがこれらを満たすかどうかは検証されていないという点である。第3に、ゲストハウスという拠点的な場所において求められる〈あるじ〉の役割は何かを解明する必要があるという点である。第4に、ゲストハウスを新規開業した者や日々の運営を担う者である〈あるじ〉以外の者が、〈あるじ〉のように振る舞ったり、その役割を担ったりすることの可能性について検討する必要があるという点である。そして第5に、国内のゲストハウス事例とした先行研究では、ゲストハウスにおける人と人の出会いや交流について肯定的に捉える意見が多くみられたが、ゲストハウスをより多面的に考察するという課題が残されている点である。

第3章

第3章から第6章では、現地調査で得た量的・質的データの結果を基に、考察を行った。第3章では、国内のゲストハウスを対象に、2012年と2017年に実施した質問紙調査（以下、2012QSと2017QSと記す）の結果を基に、ゲストハウスの運営と利用の特徴を明らかにした。また、5年間という時間の流れの中で、ゲストハウスの特徴がどのように変化したのかについても考察した。

2012QSでは、353軒のゲストハウスに対して調査票一式を郵送し、102軒から回答を得た（回収率28.9%）。一方2017QSでは、992軒のゲストハウスに対して同じく調査票一式を郵送し、287軒から回答を得た（回収率28.9%）。両調査から明らかになったことは、この5年間で、本調査が調査票配布対象とした施設数が大幅に増加したこと、ゲストハウスと称する宿泊施設が増加傾向にあること、ゲストハウスの経営主体として7割以上を占めていた「個人事業」が減少し、「株式会社」や「有限・持分会社等」が経営するゲストハウスの存在が増したこと、カフェやバー等の有料の料飲サービスを展開するようなゲストハウスもやや増加したこと等の変化が起きていたことを明らかにした。また、近年開業したゲストハウスの中には、プライバシーやプライベート空間を確保できるようなカプセル型のベッドが導入されていることも指摘した。一方で、経年変化がほとんど確認されなかった点は、旅館業法上の営業許可区分や建物様式、最大収容客数、宿泊者の年齢・同行者という点だった。本調査では、先行研究においてゲストハウスであることの前提として捉えられてきた「相部屋があること」や「素泊まりであること」、「個人経営であること」等の点が徐々に変容している兆しが確認された。これらの変化を受け止めた上で、ゲストハウスの定義を見直すことが必要であることも指摘した。

第4章

第4章では2つの目的を掲げた。第1の目的は、2012QSと2017QSの質問紙調査に設けた「ゲストハウスの開業の動機・背景に対する自由記述回答」の分析を通じて、ゲストハウス開業に至った背景や動機を明らかにすることである。第2の目的は、これら明らかにした背景や動機を基に、開業者らがゲストハウスにどのような役割・機能、あるいは可能性を見出しているのかについて検討することである。なお本章では、分析ツールとして Step for Coding and Theorization (SCAT) を用いた。

その結果、第1の目的に対して次の点が明らかとなった。すなわち、ゲストハウスの新規開業の背景には、個々の旅行経験やゲストハウスとの接触、近年のインバウンド増加に伴う宿泊ニーズの高まり、自身の追究したい暮らしや働き方を実現するためなど、複数の社会的背景や個人の考え・経験があることが明らかとなった。第2の目的については、次の3点が明らかになった。すなわち第1に、開業者らは、様々な人との出会いや交流が起こる場所としてゲストハウスに可能性を見出していることが明らかになった。また、拠点や場所をつくりたいという思いを実現するために、ゲストハウス開業という手段を選ぶということも明らかになった。第2に、ゲストハウスという宿を新規に立ち上げることで、国内の宿泊環境に対する不満を少なからず解消できたり、空き家等の再活用に有効であると捉えられていたりすることが確認された。第3に、ゲストハウスの新規開業は、あくまでも生活費を稼ぐためや既存事業の拡大を目指すための手段であることも明らかになった。

第5章

第5章では、1990年代後半から2012年頃までに開業したゲストハウスの〈あるじ〉に対してヒアリング調査を行い、次の2点を明らかにすることを目的とした。すなわち1点目は、国内のゲストハウスの展開と当時のゲストハウスの役割を明らかにすることであり、2点目は、ゲストハウスが、拠点的な場所として成立するための〈あるじ〉の役割を明らかにすることである。なお、調査対象は札幌や仙台、長野、京都、沖縄のゲストハウスの〈あるじ〉である。

調査の結果、第1の目的に対して次の点が明らかになった。すなわち、1990年代後半から2005年頃にかけて開業したゲストハウスは、長期滞在者や移住希望者の受け入れ先として位置づけられていたことや、ゲストハウスの無さが開業動機につながったことが明らかになった。そして、2008年以降に開業したゲストハウスでは、先に開業していたゲストハウスと共通する思いや動機が確認された一方で、ゲストハウスの創出に対する意欲はまちまちであり、「ゲストハウスである必要はない」と考える〈あるじ〉もいることが確認された。

第2の目的に対しては、「持続的な営業活動を行っていくための〈あるじ〉の役割」という点と、「ゲストハウスという拠点的な場所を創出し、運営するための要件」という2つの

側面から考察を行った。前者の〈あるじ〉の役割は、主に4つあることを示した。すなわち第1に、ゲストハウスの〈あるじ〉は、ゲストハウス運営を事業として成立させ、継続的に営業できるよう適切な管理を行うという役割、第2に、宿泊者が休息や睡眠を十分にとれるよう宿泊機能を維持するという役割である。第3に、ゲスト対応や清掃を行う際には、夫婦等の複数の〈あるじ〉による役割分担が行われるということ、第4に、〈あるじ〉自身の個性や趣味等を活かした運営を行うという役割である。また、後者の要件として2点指摘した。すなわち、宿泊者や近隣住民に関わらず、多様な人びとが出入りできるような機会を設けるということと、仲介役としての〈あるじ〉の存在が欠かせないということである。なお、すべてのゲストハウスが同一の運営方針を取っているわけではなく、個々の〈あるじ〉によってゲストハウスの「色」は異なることも指摘した。

第6章

第6章では、ゲストハウスの宿泊者と、ゲストハウスをしばしば訪れる近隣住民に対するヒアリング調査と、ゲストハウスの共有スペースにおける参与観察で得られた結果を基に、彼・彼女らが見出すゲストハウスの意義ならびにゲストハウスの〈あるじ〉の役割について明らかにすることを目的とした。

まず、宿泊者と近隣住民に対するヒアリング調査の結果、次の2点が明らかになった。すなわち第1に、宿泊者にとってのゲストハウスは、「比較的安価な料金で宿泊場所を提供する施設」であるということと、「多様な人びととの出会いや交流の機会が得られる可能性がある場所」ということの大きく2つの機能ないし役割があると認識されているという点である。ゲストハウスを事例として取り上げた先行研究では、どちらか一方の機能を取り上げた指摘が目立つが、1つのゲストハウスであっても複数の機能や役割があることと、滞在費の安さを求める者と交流を重視する者が接触する場所となっていることが明らかになった。第2に、近隣住民同士の新たな接点がつくられるような場所として、ゲストハウスが機能しているという点である。

次に、Hゲストハウス（仮称）の共有スペースにおける参与観察の結果から、拠点的な場所と〈あるじ〉の関係の一端が明らかになった。そこでは、ゲストハウスは、宿泊者や近隣住民が集い、様々なコミュニケーションを展開する場所であることが確認されたが、〈あるじ〉1人では、これらの場所を維持・管理することは困難であることが明らかになった。また、その場にいる大勢の人びとが楽しむためには、〈あるじ〉以外の人びとも〈あるじ〉的な役割を担っている可能性を示唆した。

第7章

第7章では、はじめに本研究の目的と先行研究のレビューで確認された課題について簡潔にまとめた。その上で、総合考察を行い、人と人、人と社会の接点が生まれるような拠点

的な場所の意義と、その場所を代表し、日々その場所の適切な運営を行う〈あるじ〉の役割について考察した。

拠点的な場所の意義と〈あるじ〉の役割について明らかになった 3 点をまとめておく。第 1 に、宿が拠点的な場所の 1 つとなるためには、「不動 (immobile) 性」、「小規模性」、「個人による場所の立ち上げと〈あるじ〉の存在」、「旅行者を含む多様な人びとがアクセスできる環境」の 4 つの要件を満たす必要があることを指摘した。しかし本研究では、この 4 要件を満たしたとしても、宿のキャパシティの問題や〈あるじ〉の個性、宿の運営に対する意識・姿勢によっては、万人に開かれた拠点的な場所として機能するとは限らないという点も明らかになった。第 2 に、宿が拠点的な場所として位置づけられることで、一時的な滞在者である旅行者を含めた様々な人びとが行き交う場所の選択肢が広がり、人と人、人と社会との接点がより多層的になる可能性がある。第 3 に、拠点的な場所を適切に管理運営していくためには、〈あるじ〉の存在は欠かすことができない。それは、〈あるじ〉がその場所を代表する者という役割を担っているとともに、拠点的な場所に居合わせた者同士の接点をつくり出すような役割も担っているためだと指摘した。その一方で、〈あるじ〉的な振る舞いをする宿泊者や近隣住民の姿も確認され、〈あるじ〉1 人がその場所の指揮権を握っているとは言えないという点も明らかになった。

そして最後に、本研究の限界と課題を示した。本研究は、拠点的な場所の 1 つとしてゲストハウスを取り上げ、国内のゲストハウスの概要を掴むための質問紙調査や、ゲストハウスの〈あるじ〉や宿泊者、近隣住民に対するヒアリング調査ならびに参与観察を通じて、拠点的な場所としての宿の意義と〈あるじ〉の役割について検討したものである。本研究で提示した結果や結論は、都市計画やまちづくり、観光研究の領域において一定の貢献を果たしたと考えられる。しかしながら、本研究は一部のゲストハウスやその〈あるじ〉、宿泊者・近隣住民を対象に行われた現地調査を基にした考察であるため、ここで提示された視点や明らかにされた点は一般化するには限界がある。

また、本研究では、具体的な調査対象として比較的小規模かつ個人経営のゲストハウスを取り上げたが、ゲストハウスがよく知られた存在となった現在、大手不動産業者やホテル事業者によるゲストハウス等の開業・運営も進行している。これらは比較的規模の大きな宿泊施設であるが、建物の 1 階部分をまちの居場所や交流拠点として位置づけ、多様な人びとが利用できる場所としているケースがある。本研究では、このような取り組みや動向について扱っていない。加えて、筆者自身がゲストハウスを対象に調査研究を進めて 10 年近くが経過した。筆者が、調査の初期に訪ねたゲストハウスの〈あるじ〉の年齢や家族構成も変化し、閉館や代替わりをしたゲストハウスも散見されるようになった。ゲストハウスという宿の多くが、〈あるじ〉によって運営されていることを鑑みると、彼・彼女らのライフステージの変化や、宿の運営等に関する意識や実践の移り変わりについても考察する必要がある。これらの課題については、今後筆者が取り組むべき課題である。